源氏物語における敬語の例外的取捨と語り手*

（その三）

山　本　ト　シ**

（1992年5月19日受理）

一

玉上琢弥氏は「源氏物語の地の文で敬語が付きうるのは，皇族と上達部の列以上であり，特別の君達これに準じ，女性もほぼ同じい。」と述べられた。しかし実際にはこの原則が破られていることがよくある。かつて私は，源氏物語第一部，第二部の地の文において，通常の敬語の使い方を外れ，例外的に付加又は除去されている例について，なぜ例外になるのか，その原因を探ることを試みた注1。その結果，敬語の使用が例外的になる原因はいくつかあるが，用例数の最も多いのは，「語られる内容が作中人物の心の内奥や感覚に映ずる事柄，ひそかな状態・思惟・動作に及ぶ時，敬語が除去される」というものであった。この表現は，主観直叙，または体験話法と呼ばれたり，「語り手が人物に一体化している。密着している」などと説明されたりする。語り手が作中人物と一体化し，語りの視点が当の人物に置かれるため，敬語の使用法もその人物を基準としたものになり，通常の地の文とは異なるのである。第一部の始めの方の巻から例をあげる。いずれも源氏に関する叙述だが，敬語が付いていない。（引用は角川文庫『源氏物語』。漢数字は巻数，算用数字は頁数。上に述べた表現のために無敬語となっている語に下線を付す。）

- ○　けしきある鳥のから声になきたるも，ふくろふはこれにや，とおぼゆ。（夕顔一130）
- ○　「かの人の御かはりに，明け暮れの慰めにも見ばや」と思ふ心，深うつきぬ。（若紫一158）
- ○　いとわりなくて見奉る程さへうつゝとはおぼえぬぞ，わびしきや。（若紫一173）
- ○　なよよかなる御衣に，髪はつやつやとかかりて，末はふさやかに探りつけられたる程，いとうつくしう思ひやらる。（若紫一182）

このような叙述は，当の作中人物しか知り得ぬ真実の心や感覚，或いは秘かな状態を語り手の介在感なしに読者に知らせたり，緊迫感や臨場感を生き生きと感じさせたりすることのできる，大変効果的な表現であると思われる。本稿では，第三部においても多用されている上記と同様の表現を調査し，それをもとに源氏物語の語り手について考察しようと思う。対象とするのは宇治十帖と，構想上それに先立つ匂兵部卿巻である。従って本稿で第三部と称するのは，匂兵部卿巻，橋姫巻～夢浮橋巻の十一帖である。

二

作中人物の心の内奥や感覚に映ずる事柄，秘かな状態・思惟・動作を描く時，無敬語で表現するという叙述方法は，第三部の主要な人物すべてに使われているが，最も多く使われている薫についてまず述べることにする。

薫に関して特に長大な無敬語の叙述が現れるのは，

出生の秘密への懐疑の記事（匂兵部卿巻）
大君，中君を垣間見する記事（橋姫巻）
大君の死の前後の記事（総角巻）
中君を思慕し，中君と対座する記事（宿木巻）
浮舟を垣間見する記事（宿木巻）
女一宮を垣間見し，思慕する記事（蜻蛉巻）

などである。いずれも薫が人には洩らせぬ思いを抱いたり，秘かに行動したりすることを描いた場面である。これらの無敬語の用例は，薫と，薫を叙述する語り手との距離によって，何段階かに分けられるように思う。各段階の間にはっきりした線を劃することは難しいし，どの段階に属せしめたらよいか迷う例もあるが，ひとまず四つのグループに分けて用例を示したい。

（イ）

- ○　「およばずとも，これも月に離るるものかは」など，はかなきことを，うちとけ宣ひかはしたるけはひども，さらによそに思ひやりしには似ず，いとあはれになつかしうをかし。（橋姫八110）
- ○　あな口惜し，と思ひて，ひき帰る折しも，風のすだれをいたう吹きあぐべかめれば，「あらはにもこそあれ。その御几帳おし出でてこそ」という人あなり。（椎本八167）
- ○　世の中をことさらにいとひはなれねと，すすめ給ふ仏などの，いとかくいみじきものは思はせ給ふにやあらむ。見るままに物かくれ行くやうにて，消え

---

* The Special Usage of Honorifics in the Tale of Genji: Omissions and Additions based on the Narrator's Position Ⅲ

** Toshi Yamamoto　文学科国語国文専攻

はて給ひぬるは，いみじきわざかな。引きとどむべき方なく，足ずりもしつべく，人のかたくなしと見むことも覚えず。（総角八247）

○　なほいとよく似給へるかな，と思ふにもまづぞ悲しき。（宿木九54）

上の諸例は，薫に敬語が使われず，心情形容詞が文末に置かれたり，自発の助動詞や，薫自身の詠嘆や推量を表す助詞，助動詞（・・の語）が使われたりし，あたかも薫自身が語っているような表現である。語り手が薫と一体化していると言ってもよい。島津久基氏が言われた主観直叙，西尾光雄氏が言われた体験話法と考えてよいだろう。なお，現代語では心情形容詞は「述部の言い切りの形としては話者の感情内容しか現わさない」注2と言われる。源氏物語の地の文にしばしば宿木九54の如く心情形容詞で言い切る形があるのは，その部分は話者が作中人物と一体化した表現になっているためと思われる。

次に，(イ)に類する例をあげる。

○　げに聞きしよりもあはれに，住まひ給へるさまよりはじめて，いと仮りなる草の庵に，思ひなし，ことそぎたり。（橋姫八105）

○　「……女君たち，何ごこちして過ぐし給ふらむ。世の常の女しくなよびたる方は遠くや」と，推しはからるる御ありさまなり。（橋姫八105）

○　黄鐘調に調べて，世の常のかき合はせなれど，所がらにや耳なれぬ心地して，かきかへすばちの音も，ものきよげにおもしろし。（橋姫八108）

○　峰の八重雲，思ひやる隔て多く，あはれなるに，なほこの姫君たちの御心のうちども心苦しう，何ごとを思し残すらむ，かくいと奥まり給へるもことわりぞかし，など覚ゆ。（橋姫八116）

○　我は浮かばず，玉の台（うてな）に静けき身，と思ふべき世かは，と，思ひ続けらる。（橋姫八118）

○　思ひしよりはこよなくまさりて，をかしかりつる御けはひども，面影に添ひて，なほ思ひ離れがたき世なりけり，と，心弱く思ひ知らる。（橋姫八119）

○　たびたびそそのかし給へど，とかく聞こえすまひてやみ給ひぬめれば，いと口惜しう覚ゆ。（橋姫八125）

○　いかなる事と，いぶせく思ひわたりし年ごろよりも，心苦しうて過ぎ給ひにけむいにしへざまの思ひやらるるに，罪軽くなり給ふばかり，おこなひもせまほしくなむ。（椎本八138）

○　心苦しく思ひやらるる御心のうちなり。（椎本八140）

○　わざとなき御遊びの，心に入りて，をかしうおぼゆれど，うちとけても，いかでかは弾きあはせ給はむ。（椎本八141）

○　いといみじくしのびがたきけはひにて，入り給ひぬなり。ひきとどめなどすべき程にもあらねば，あかずあはれにおぼゆ。（椎本八154）

○　これや限りの，など宣ひしを，などか，さしもやはとうち頼みて，また見奉らずなりにけむ。秋やはかはれる，あまたの日数も隔てぬ程に，おはしにけむ方も知らず，あへなきわざなりや。（椎本八156）

○　ほの見奉りしも思ひ比べられて，うち嘆かる。またゐざり出でて，「かの障子は，あらはにもこそあれ」と，見おこせ給へる用意，うちとけたらぬさまして，よしあらむとおぼゆ。……これはなつかしうなまめきて，あはれげに，心苦しうおぼゆ。（椎本八168）

○　まして峰のあらしも籬の虫も，心細げにのみ聞きわたさる。（総角八180）

○　にはとりも，いづかたにかあらむ，ほのかにおとなふに，京思ひ出でらる。（総八181）

○　いとどわが心かよひて覚ゆれば，さかしだち憎くも覚えず。（総角八190）

○　ことなしびに書き給へるが，をかしく見えければ，なほえ怨じはつまじく覚ゆ。（総角八195）

○　思ひつるもしるく，起きおはしましけり。（総角八196）

○　きさいの宮など聞こしめしいでては，かかる御ありきいみじく制し聞こえ給へば，いとわづらはしきを，せちに思したる事なれば，さりげなく，と，もて扱ふもわりなくなむ。（総角八199）

○　「女一宮もかくぞおはしますべかめる。いかならむ折に，かばかりにてもゝの近く，御声をだに聞き奉らむ」とあはれに覚ゆ。（総角八211）

○　ほのかにうち笑ひ給へるけはひなど，あやしくなつかしく覚ゆ。（総角八219）

○　いと心苦しく，我さへはづかしき心地して……など人の御うへをさへあつかふも，かつは怪しくおぼゆ。（総角八233）

○　むなしく見なして，いかなる心地せむ，と，胸もひしげて覚ゆ。（総角八241）

○　「……少し憂きさまをだに見せ給はばなむ，思ひさますふしにもせむ」とまもれど，いよいよあはれげにあたらしく，をかしき御ありさまのみ見ゆ。……ふすまを押しやりて，なかに身もなき雛（ひひな）を臥せたらむこゝちして……「あるべきものにもあらざめり」と，見るが，をしき事たぐひなし。……こまかに見るままに，たましひもしづまらむかたなし。（総角八246）

○　かくながら，むしのからのやうに見ても見るわざ

ならましかば，と，思ひまどはる。（総角八248）

○　この君は，けざやかなる方に，いま少し児(こ)めき，け高くおはするものから，なつかしくにほひある心ざまぞ，劣り給へりけると，事にふれて覚ゆ。（総角八250）

○　京の家の限りなくと磨くも，えかうはあらぬはや，と覚ゆ。わづかに生きいでてものし給はましかば，もろともに聞こえまし，と思ひつづくるぞ，胸よりあまるここちする。（総角八251）

○　かくてのみやは，あたらしき年さへ嘆きすぐさむ。（総角八256）

○　いみじう御心に入りてもてなし給ふなるを聞き給ふにも，かつはうれしきものから，さすがに，わが心ながらをこがましく，胸うちつぶれて，「物にもがなや」と，かへすがへすひとりごたれて，（歌）とぞ言ひくたさまほしき。（早蕨九33）

○　ゐてありきたばかり聞こえしほど思ひいづるも「いとけしからざりける心かな」と，かへすがへすぞくやしき。（宿木九48）

○　「げにわれにても，よしと思ふをんなご持たらましかば，この宮をおき奉りて，内にだにえ参らせざらまし」と思ふに，「誰も誰も，宮に奉らむと心ざし給へる女(むすめ)は，なほ源中納言にこそ，と，とりどりに言ひならふなるこそ，わがおぼえのくちをしくはあらぬなめりな。さるはいとあまり世づかず，ふるめきたるものを」など心おごりせらる。（宿木九70）

○　まだ宵と思ひつれど，あかつき近うなりけるを，見とがむる人もやあらむ，とわづらはしきも，女の御ためのいとほしきぞかし。「……例のをこがましの心や」と思へど，「なさけなからむことは，なほいと本意なかるべし。……」など，さかしく思ふにせかれず，今のまも恋しきぞ，わりなかりける。（宿木九79）

○　「あまり言ずくななるかな」と，さうざうしくて，をかしかりつる御けはひのみ恋しく思ひいでらる。……さすがになつかしく言ひこしらへなどして，いだし給へる程の心ばへなどを思ひいづるも，ねたく悲しく，さまざまに心にかかりて，わびしくおぼゆ。なに事も，いにしへにはいと多くまさりて思ひいでらる。（宿木九80）

○　「今日は，宮渡らせ給ひぬ」など，人の言ふを聞くも，うしろ見の心は失せて，胸うちつぶれて，いとうらやましくおぼゆ。（宿木九80）

○　見るには先づかきくらし，悲しきことぞ限りなき。（宿木九96）

○　男方も心づかひし給ふ頃なれど，例の事なれば，そなたざまには心も入らで，この御事のみいとほしく嘆かる。（宿木九108）

○　つつましげに下(お)るるを見れば，まづ頭(かしら)つき様体細やかにあてなる程は，いとよくもの思ひいでられぬべし。（宿木九121）

○　ただ今も這ひ寄りて「世の中におはしけるものを」と言ひ慰めまほし。（宿木九124）

○　しひてかき起こし給へば，をかしき程にさし隠して，つつましげに見いだしたるまみなどは，いとよく思ひいでらるれど，おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ，心もとなかめる。（東屋九185）

○　昔のいとなえばみたりし御姿の，あてになまめかしかりしのみ思ひいでられて。（東屋九186）

○　白き扇をまさぐりつゝ添ひ臥したるかたはらめ，いとくまなう白うて，なまめいたる額髪のひまなど，いとよく思ひいでられて，あはれなり。（東屋九187）

○　まめ人はのどかに見給ひつつ，「あはれ，いかにながむらむ」と思ひやりて，いと恋し。（浮舟十57）

○　「……さても，知らぬあたりにこそ，さる好き事をも宣はめ，昔より隔てなくて，あやしきまでしるべして，ゐて歩き奉りし道にしも，うしろめたく思し寄るべしや」と思ふに，いと心づきなし。（浮舟十67）

○　これも，いとかうは見え奉らじ，をこなり，と思ひつれど，こぼれそめてはいととめがたし。（蜻蛉十98）

○　「いな持たらじ。しづくむつかし」と宣ふ御声，ほのかに聞くも，限りなくうれし。（蜻蛉十119）

○　「……昨日かやうにて，われまじりゐ，心にまかせて見奉らましかば」とおぼゆるに，心にもあらずうち嘆かれぬ。（蜻蛉十121）

○　おぼえ給へり，と見るにも，まづ恋しきを，いとあるまじきこと，と，しづむるぞ，ただなりしよりは苦しき。（蜻蛉十122）

○　芹川の大将の遠君の女一の宮思ひかけたる，秋の夕ぐれに，思ひわびて出でて行きたるかた，をかしく書きたるを，いとよく思ひ寄せらるかし。かばかり思し靡く人のあらましかば，と，思ふ身ぞくち惜しき。（蜻蛉十126）

○　「……なほ心憂く，わが心乱り給ひける橋姫かな」と思ひあまりては，また宮の上にとりかかりて，恋しうもつらくも，わりなきことぞ，をこがましきまでくやしき。（蜻蛉十127）

○　……など宣ひつゝ見れば，唐衣は脱ぎすべしおしやり，うちとけて，手習ひしけるなるべし，硯の蓋にすゑて，心もとなき花の末手折りて，もて遊び

けりと見ゆ。（蜻蛉十131）

○ 「……すこしは好きもなならはばや」など思ふに，今はなほつきなし，（蜻蛉十134）

（ロ） 次にあげるのは，(イ)と同様に薫に敬語が使われていないが，薫自身の推量，詠嘆を表す助詞・助動詞や，文末の心情形容詞などがなく，(イ)と比すと客観的描写の感が強いものである。

○ 事にふれて，我が身につゝがある心地するも，ただならずもの嘆かしくのみ，思ひめぐらしつゝ，「宮もかく盛りの御かたちをやつし給ひて，何ばかりの御道心にてか，にはかにおもむき給ひけむ。……なほつつむべき事のきこえにより，我には気色を知らする人の無きなめり」と思ふ。（匂兵部卿八30）

○ 「その程に思し定めたなり」と，伝にも聞く，みづからの御けしきをも見れど，心のうちには，なほあかず過ぎ給ひにし人の悲しさのみ忘るべき世なく覚ゆれば，「うたて，かく契ふかくものし給ひける人の，などてかはさすがにうとくては過ぎにけむ」と心得がたく思ひいでらる。「……昔ありけむ香のけぶりにつけてだに，今ひとたび見奉るものにもがな」とのみ覚えて，やむごとなき方ざまにいつしかなど急ぐ心もなし。（宿木九45）

○ ここらよき人を見集むれど，似るべくもあらざりけり，とおぼゆ。おまへなる人は，まことに土などのここちぞするを，思ひしづめて見れば……愛敬づきたり。声聞くにぞ，この心ざしの人とは知りぬる。（蜻蛉十119）

上にあげた三例は，「思ふ」「見れど」「急ぐ心もなし」「知りぬる」など，薫の思惟，動作，状態などを表す動詞があり，(イ)に比べると語り手が客観的に薫を描写しているような印象を受ける。しかし(イ)と同様に薫の心の内面が無敬語で述べられており，また，(ロ)の如き表現は(イ)と近接した箇所によく現れることからも，(ロ)は(イ)とよく似た表現と考えてよいのではないかと思う。これについては，次のような諸先学の意見もある。

第一部の野分巻に夕霧が紫上を垣間見る場合がある。紫上のいる御簾の内部は，夕霧が目にし耳にしたままに主観直叙法で描かれる。主観直叙法では夕霧に敬語が使われないが，その前後の夕霧の思惟や動作も「立ちとまりて」「見る」「思ふに」「立ち去るにぞ」「立ちのきぬ」と，無敬語で叙述される。これについて根来司氏は「話主が作中場面の中で作中人物夕霧と一体になっているそのせいであると考えてまちがいなかろう」と述べておられる注3。また，若紫巻の「かの人の御かはりに，明け暮れの慰めにも見ばや，と思ふ心，深うつきぬ。」という文を玉上琢弥氏は，島津久基氏が主観直叙と呼んだものに「相似ているやう」だと述べておられる注4。また，森一郎氏は若紫巻の「せちに隠れ給へどおのづから見奉る」という文について，「源氏の主体に即した，源氏の立場からの藤壺への視点の叙述」と述べておられる注5。三氏のあげた野分巻，若紫巻の三例は，当の作中人物のみが知る心の状態や秘かな行動が無敬語で叙述されているという点で，上にあげた(ロ)の三例と同じである。根来氏，森氏はこれを，語り手が作中人物と一体化している，又は作中人物に即した叙述であると説明している。玉上氏が「似ているやう」とした主観直叙とは，語り手が作中人物に一体化した叙述方法に他ならない。つまり三氏とも，無敬語で作中人物の秘かな心の状態や動作を述べる表現を，語り手が作中人物に一体化している表現と理解されているわけである。上にあげた(ロ)の三例も，三氏に倣って，語り手が薫に即している，或いは一体となっている，主観直叙に近い表現と見ることが許されるだろう。薫に敬語が付かないのは，叙述の視点が薫に置かれているためと考えられる。

(ロ)の類例の中には，薫の心の内奥が長く無敬語で叙述された後，最後に敬語が付くものがある。これは，文末の敬語で文全体の敬意が代表されていると見ることもできるが，しかし，内容が公的な記事であったり心の内奥ではない場合は，

○ 行ひをのみし給ひつゝ，あかし暮らし給ふ。（宿木九57）

○ 権大納言になり給ひて，右大将かけ給ひつ。（宿木九108）

の如くに敬語が省略されない。省略される場合は，

○ ……とひとりごちて，折りて持給へり。（宿木九51）

○ 見渡して，とみにもえ出で給はず。（宿木九102）

の如く，接続助詞「て」を介して敬語の付く動詞に続いている。これらと比べると，(ロ)にあげた文の長大な無敬語の部分は，文末の敬語によって敬意が代表されているのではなく，内容が薫の心の内奥であるため，意識的に敬語をつけなかったのだと思われる。

次に(ロ)の類例をあげる。

○ をさな心地にほの聞き給ひし事の，折々いぶかしう，おぼつかなう思ひわたれど，問ふべき人もなし。宮には，事の気色にても，知りけり，と思されむ，かたはらいたき筋なれば，世とともの心にかけて……とぞ，ひとりごたれ給ひける。……事にふれて，我が身につつがある心地するも，ただならずもの嘆かしくのみ，思ひめぐらしつゝ「……なほつつむべき事のきこえにより，我には気色を知らする人の無きなめり」と思ふ。……五つのなにが

しも，なほ後めたきを，われ，この御道を助けて，同じうは後の世をだに，と思ふ。かの過ぎ給ひにけむも，安からぬ思ひに結ぼほれてや，などおしはかるに，世をかへても対面せまほしき心つきて，元服はもの憂がり給ひけれど……（匂兵部卿八29）

○　かくはあらじ，おのづから心ゆるびし給ふ折もありなむ，と思ひわたる。（総角八178）

○　……何事もくちをしくは物し給ふまじかめり，と思へば，かの，いとほしく，うちうちに思ひたばかり給ふ有様も，たがふやうならむも，なさけなきやうなるを，さりとて，さはた，え思ひ改むまじく覚ゆれば，ゆづり聞こえて，いづかたのうらみをも負はじ，など下に思ひ構ふる心をも知り給はで，心せばくとりなし給ふもをかしけれど……（総角八198）

○　いとあかぬここちすれば，「いかに。こよなくへだたりて待るめれば，いとわりなうこそ」など，よろづにうらみつつ，ほのぼのと明けゆく程に，よべの方より出で給ふなり。（総角八203）

○　むかひの寺の鐘，枕をそばだてて，けふも暮れぬ，と，かすかなるを聞きて，（歌）（総角八250）

○　ありしさまなど，かひなき事なれど，この宮にこそは聞こえめ，と思へど，ことずくななり。（総角八255）

○　心のうちには，「かくなぐさめがたき形見にも，げにさてこそ，かやうにもあつかひ聞こゆべかりけれ」と，くやしきことやうやうまさりゆけど，今はかひなきものゆゑ，「常にかうのみ思はば，あるまじき心もこそいでくれ，たがためにもあぢきなくをこがましからむ」と，思ひ離る。（早蕨九23）

○　……と宣ふ声の，いとらうたげなるかな，と常よりもむかし思ひ出でらるるに，えつつみあへで，寄りゐ給へる柱のもとの，すだれのしたより，やをらおよびて，御袖をとらへつ。（宿木九76）

○　昔よりは少し細やぎて，あてにらうたかりつるけはひなどは，立ち離れたりともおぼえず，身に添ひたるこゝちして，さらにことごともおぼえずなりにたり。（宿木九79）

○　人して聞こえいだし給へるを聞くに，いみじくつらくて，涙のおちぬべきを，人目につつめば，しひて紛らはして……（宿木九89）

○　「げに誰もちとせの松ならぬ世を」と思ふには，いと心ぐるしくあはれなれば，この召し寄せたる人の聞かむもつつまれず，かたはらいたき筋のことをこそ選りとどむれ，昔より思ひきこえしさまなどをかの御身ひとつには心えさせながら，人はかたはにも聞くまじきさまに，さまよくめやすくぞ言ひなし給ふを……（宿木九90）

○　「何事にか」と言ふまゝに，几帳の下より手をとらふれば……（宿木九93）

○　……と宣ふを，夢語りか，とまで聞く。……と宣ふ気色見るに，「宮の忍びて物など宣ひけむ人の，しのぶ草つみ置きたりけるなるべし」と見知りぬ。（宿木九93）

○　「さりげなくて，かくうるさき心をいかで言ひはなつわざもがな，と思ひ給へり」と見るはつらけれど，さすがにあはれなり。「あるまじき事とは深く思ひ給へるものから，顕証にはしたなきさまには，えもてなし給はぬも，見知り給へるにこそは」と思ふ心ときめきに，夜もいたくふけ行くを，内には人目いとかたはらいたく覚え給ひて，うちたゆめて入り給ひぬれば，男君，ことわりとはかへすがへす思へど，なほいとうらめしく口惜しきに思ひしづめむ方もなき心地して，涙のこぼるるも人わろければ，よろづに思ひみだるれど，ひたぶるに浅はかならむもてなしはた，なほいとうたて，わがためもあいなかるべければ，念じ返して，常よりも嘆きがちにて出で給ひぬ。（宿木九95）

○　なほそなたざまには心もたたず。（宿木九96）

○　「宿世のほど口惜しからざりけり」と，心おごりせらるるものから，過ぎにしかたの忘らればこそあらめ，なほ紛るる折なく恋しく覚ゆれば，……と思ひつつ，寺のいそぎにのみ心を入れ給へり。（宿木九119）

○　これを見るにつけて，ただそれと思ひ出でらるゝに，例の，涙落ちぬ。（宿木九124）

○　「いと忍びてこのわたりになむ」と，ほのめかし聞こえ給ふを，かれもなべての心地はせず，ゆかしくなりにたれど，うちつけにふと移らむ心地はたせず。（東屋九153）

○　道の程より，昔のことかき集めつつ，……とぞおぼゆる。（蜻蛉十105）

○　ここらよき人を見集むれど，似るべくもあらざりけり，とおぼゆ。おまへなる人は，まことに土などのこゝちぞするを，思ひしづめて見れば……愛敬づきたり。声聞くにぞ，この心ざしの人とは知りぬる。（蜻蛉十118）

○　「……いかなる神仏の，かかる折見せ給へるならむ。例の，安からずもの思はせむとするにやあらむ」と，かつはしづ心なくて，守り立ちたる程に……（蜻蛉十119）

○　「などて年ごろ見奉らばや，と思ひつらむ。なかなか苦しう，かひなかるべきわざにこそ」と思ふ。（蜻蛉十120）

○　これぞ世の常と思ふ。（蜻蛉十135）

（ハ）(ロ)と同じく，薫の，人に知られることのない内心や内面的な状態が無敬語で述べられるが，(ロ)と違い，文の最後に語り手の回想を表すと思われる「けり」があり，語り手が薫の内面を説明しているかのような文がある。これらの文末の「けり」には語り手の存在が感じられ，語り手が薫と一体化しているとは言えない。次に例をあげる。

○　三の宮の年に添へて心をくだき給ふめる院の姫宮の御あたりを見るにも，一つ院の内に，明け暮れ立ち慣れ給へば，事に触れても，人の有様を聞き見奉るに，げにいとなべてならず，心にくくゆゑゆゑしき御もてなし限りなきを，同じくは，げにかやうならむ人を見むにこそ，生ける限りの心ゆくべきつまなれ，と思ひながら，おほかたこそ隔つることなく思したれ，姫宮の御方ざまの隔ては，こよなく気遠く慣らはさせ給ふも，ことわりにわづらはしければあながちにも交らひ寄らず，もし心よりほかの心もつかば，我も人もいと悪しかるべき事，と思ひ知りて，ものなれ寄ることもなかりけり。（匂兵部卿八35）

○　心のうちには，かの古人のほのめかしし筋などの，いとどうちおどろかされて物あはれなるに，をかしと見ることも，めやすしと聞くあたりも，なにばかり心にもとまらざりけり。（橋姫八122）

○　三の宮いとゆかしう思いたるものを，と，心の中には思ひいでつゝ，「わが心ながら，なほ，人には異なりかし。……宿世ことにて，ほかざまにもなり給はむは，さすがにくちをしかるべう」領じたるこゝちしけり。（椎本八141）

○　「こはなぞ。あな若々し」とは言ひながら，言ひ知らずらうたげに，心ぐるしきものから，用意深く恥づかしげなるけはひなどの，見し程よりも，こよなくねびまさり給ひにけるなどを見るに，心からよそ人にしなして，かく安からずものを思ふこと，と，くやしきにも，またげに音（ね）は泣かれけり。（宿木九77）

次にあげるのは，薫の官職呼称で文が始まるが，文の後半は薫の心の内を無敬語で叙述するものである。官職呼称が客観的描写の印象を与え，語り手が薫と一体化しているとは言えない。その点，文末に「けり」のある例と似ており，しばらく(ハ)のグループに含めておく。

○　中将の君，なかなか，みこの思ひすまし給へらむ御心ばへを，対面して見奉らばや，と思ふ心ぞ深くなりぬる。（橋姫八102）

○　中納言は，一人ふし給へるを，心しけるにや，と，うれしくて，心ときめきし給ふに，やうやう，あらざりけり，と見る。いま少し，うつくしくらうたげなるけしきは，まさりてや，と覚ゆ。（総角八192）

○　中納言の君も，なかなかたのめ聞こえけるを，うれはしきわざかな，と覚ゆ。（総角八225）

○　中納言の君は，かく宮のこもりおはするを聞くにも，心やましくおぼゆれど，「わりなしや。これは，わが心のをこがましくあしきぞかし。うしろやすく，と思ひそめてしあたりのことを，かくは思ふべしや」と，しひてぞ思ひかへして，「さは言へどえ思し捨てざめりかし」と，うれしくもあり。（宿木九85）

○　大将殿は，「かくさへおとなびはて給ふめれば，いとどわが方ざまはけ遠くやならむ。また宮の御心ざしもいとおろかならじ」と思ふは口惜しけれど，また始めよりの心おきてを思ふには，いと嬉しくもあり。（宿木九110）

(ハ)にあげた諸例は，語り手が無敬語で薫の内面を語っていると考えてよいが，源氏に関するこのような叙述はなく，第二部の夕霧や柏木には見られる。

（ニ）前項(ハ)は，語り手が薫から離れて，薫の内面や状態を無敬語で叙述しているものであった。(ハ)の諸例よりもっとはっきり語り手の存在が表現されるのは，次の如く，薫に対して批評や揶揄が加えられる場合である。

○　さしあたりて，心にしむべき事のなき程，さかしだつにやありけむ。人の許し無からむ事などは，まして思ひ寄るべくもあらず。（匂兵部卿八34）

○　いとはづかしげなめる御心どもには，聞き置き給へらむかし，と，おしはからるゝが，ねたくもいとほしくおぼゆるにぞ，また，もて離れてはやまじ，と，思ひ寄らるゝつまにもなりぬべき。（椎本八156）

○　めやすのわざや，と見奉るものから，例の，いかにぞや覚ゆる心の添ひたるぞ，あやしきや。（早蕨九35）

○　「ことさらに心を尽くす人だにこそあなれ」とは思ひながら，「きささきばらにおはせばしも」とおぼゆる心のうちぞ，あまりおほけなかりける。（宿木九43）

○　わがまことにあまりひとかたにしみたる心ならひに，人はこよなくもどかしく見ゆるなるべし。（宿木九49）

○　「……故君にいとよく似給へらむ時に，うれしからむかし」と思ひ寄らるゝは，さすがにもて離るまじき心なめりかし。（宿木九70）

○　ただこのことのみ，つとおぼゆるぞ，けしからぬ心なるや。（宿木九80）

○　ゆゝしきまで白く美しくて，高やかに物語りし，うち笑ひなどし給ふ顔を見るに，わがものにて見まほしくうらやましきも，世の思ひ離れがたくなりぬるにやあらむ。（宿木九114）

○　「……明石の浦は心にくかりける所かな」など思ひ続くることどもに，「わが宿世はいとやむごとなしかし。まして，並べて持ち奉らば」と思ふぞ，いとかたきや。（蜻蛉十135）

㈡にあげた諸例には，批評の内容によっては薫自身の感想を述べていると解し得るものもある。次の例などもその典型であり，㈠に属せしめるべきかもしれない。

○　うちとくべくもあらぬものから，なつかしげに愛敬づきて，もの宣へるさまの，なのめならず心に入りて，思ひ入らるゝもはかなし。（総角八177）

以上，薫の心の内面や秘かな状態・動作などに関して無敬語で記述された諸例を見てきた。これをもう一度整理すると次のようになる。

㈠　主観直叙

㈡　心の内面や秘かな状態・動作などの叙述

㈢　㈡と同様の内容だが，官職呼称が文頭にあったり，「けり」が文末にあったりする。

㈣　批判やからかいを伴う。

上の㈠は語り手が薫と一体化した表現であり，㈣は語り手が薫から全く離れている表現である。㈠，㈡，㈢，㈣の変化は連続的であり，語り手が薫から次第に離れてゆく階梯と見ることができる。

三

前章で述べた，心の内面や秘かな状態などに関する無敬語の叙述は，もちろん第三部の他の主要人物の場合にも見られる。それらについても簡単に触れておきたい。

薫に次いで上述の原因による無敬語の叙述が多いのは中の君，特に宿木巻においてである。叙述の内容は，夫・匂宮と六の君の結婚による悩み，薫に恋慕されることによる悩みで，いずれも当の中の君一人が知る深い懊悩を扱った箇所である。

浮舟は敬語の有無の変動が大きいが，おおよその傾向として，匂宮や薫と共にいる場面では敬語が付かず，母や女房，或いは小野の尼達と共にいる場面では付く，ということが言える。このことは敬語の有無が，物語の場面で相対する人物との身分関係によっても左右されることを示している。しかし，敬語の付く叙述の中で，内容が浮舟の内心に及ぶ時は，薫や中君の場合と同様，無敬語になる。

大君や匂宮は，上の三人ほど多くはないが，やはり無敬語で叙述される例がある。大君は心の内奥が描かれる人物であるが，彼女の内面は心内語の形をとることが多く，無敬語の地の文は中君よりもずっと少ない。

四

源氏物語の叙述方法について玉上琢弥氏は，「光る源氏らを実際に知っている人，古御達が思い出話をする。それを筆記し編集してこの書にした，というたてまえである。」と述べられた。源氏物語の語り手が主人公らに近侍した女房であることは，地の文の通常の敬語の使い方からも首肯できる。しかし一方，これまで見てきたとおり，源氏物語全体の地の文には，通常の敬語の使用法を外れる多数の例がある。これらは，玉上氏の述べた「たてまえ」以外の語りの方法を示していると思われるが，それは第一部から第三部にかけてどのように変化し，物語の内容とどのように関わっているのだろうか。

源氏物語には，しばしば，

○　まだ中将などにものし給ひし時は，うちにのみさぶらひようし給ひて，おほいどのにはたえだえまかで給ふ。しのぶの乱れやと疑ひ聞ゆることもありしかど（中略）さるまじき御ふるまひもうちまじりける。（帚木一50）

○　あはれと忍ばるばかり尽くい給へるは，見所もありぬべかりしかど，その折のここちのまぎれに，はかばかしうも聞き置かずなりにけり。（須磨三23）

の如く，源氏の行動や運命の浮沈に一喜一憂する，源氏とかなり深い関係を持つ語り手の姿を彷彿させる草子地がある。第三部における次のような草子地も，上の帚木巻や須磨巻の草子地と同じ語り手によるものと考えてよいだろう。

○　むかし，光る君と聞こえしは，さるまたなき御おぼえながら，嫉み給ふ人うち添ひ，母方の後見なくなどありしに……よろづさりげなくて久しくのどけき御心掟にこそありしか，この君は，まだしきに，世の覚えいと過ぎて，思ひ上がりたること，こよなくなどぞものし給ふ。（匂兵部卿八31）

○　昔の源氏は，すべて，かく立てて，その事と，やうかはり，しみ給へる方ぞなかりしかし。（匂兵部卿八33）

しかし一方で，語り手は全知視点を持ち，近侍古女房という具体像の範囲をはるかに超越した，自在な語りを至るところに展開してもいる。両者――近侍古女房としての語り手と，全知視点を持つ自在なる語り手と――の関係を統合的にどう捉えるかはともかく，源氏物語にはこの二種の語り手像が読み取れるのである。

二章で，薫に関する無敬語の叙述を四種に分けて掲げ

た。(イ)から(ニ)への変化は連続的ではあるが，大別すれば，語り手が薫と一体化している，または即していると見なせる(イ)(ロ)と，語り手が薫と分離している(ハ)(ニ)の二つに分けることができるだろう。第一部における(イ)(ロ)の如き表現，即ち語り手が作中人物と一体となった表現の語り手について，かつて私は，

1. 当の作中人物しか知り得ぬ秘かな心情や動作などを述べる。
2. 作中人物に一体化して語る。その際，その人物に敬語を用いない。
3. 作中人物に一体化し，またすぐに離れて語り手としての意見を述べる。
4. 作中人物の秘かな心情や動作などを無敬語で述べていても，その人物が衆人環視の行動に移ると，すぐに敬語付きの表現に変える。

という条件をあげ，この条件にかなう語り手とは，具体的，固定的な像を持つ近侍古女房と考えるよりも，全知視点を持ち，自在に語ることの出来る，作者に近い語り手と考えるのが適当であると述べた注6。二章に掲げた第三部の(イ)(ロ)の諸例の語り手も，同じく，全知視点を持つ自在な語り手と考えてよい。

この全知で自在な語り手による(イ)(ロ)の如き叙述は，第一部の源氏に関しては36文。第三部の薫に関しては101文ある。しかも一つの文は薫に関する叙述の方がずっと長文であり，且つその長大な文が連続している箇所もしばしばある。全体量としては第一部は第三部より長いから，(イ)(ロ)の如き叙述は，各部の全体量にてらしても，第一部の源氏より第三部の薫に関しての方がずっと多く使われているわけである。しかも源氏の場合の叙述のうち長大なものは，夕顔巻における夕顔の遺骸を抱いて過ごす廃院の夜の恐ろしさ，末摘花巻における雪の朝の末摘花の容貌の観察など，源氏が感覚で捉えたことを叙する内容であって，薫の場合のように心の内面を述べる無敬語の叙述が長く続くということはない。

上に述べた(イ)(ロ)の文の数の比較及び内容の比較は源氏と薫に限ったものであるが，二人はそれぞれ第一部と第三部の最重要人物であるから，これらの相違は，一部から三部にかけての物語の変化を考える上で，大きな意味を持つと思われる。即ち，(イ)(ロ)の如き無敬語の叙述は人物の心の内奥や秘かな状態・思惟・動作などを述べるものであるから，第三部の薫に関する(イ)(ロ)の叙述の増加は，第三部における，人物の心の内奥や秘かな思惟・状態・動作などに関する叙述の増加を意味すると思われる。

ところで，語り手が作中人物と一体化し，人物の心の内奥を語るという(イ)(ロ)の如き表現の最も極まった形は心内語である。(イ)の中には心内語と区別し難いものも多くある。その心内語について鈴木一雄本学学長のグループは詳細な調査をされた。鈴木氏は，源氏物語の総行数に対する心内語の行数の百分比が

第一部　8.9%，第二部　10.8%，第三部　14.6%

と次第に増加することを示され，第一部から第三部にかけての「物語世界の心理主義的傾向への傾斜が明らか」と述べておられる注7。鈴木氏が心内語の増加によって指摘された，第三部における「心理主義的傾向への傾斜」は，(イ)(ロ)の如き地の文の無敬語表現を源氏と薫で比較した場合，一層顕著であると思われる。

一方，「語り手」という観点から見ると，(イ)(ロ)は，前述したように，全知視点を持つ，作者に近い自在な語り手による叙述と考えられる。また心内語は作中の他者には伝達不可能なものであるから，心内語も(イ)(ロ)と同じく，作中に具体的な像を結ぶ近侍古女房による語りではなく，全知視点を持つ自在な語り手によると考えてよいだろう。即ち，第三部における心内語の増加及び(イ)(ロ)の如き地の文の無敬語表現の増加は，近侍古女房としての語り手の後退，全知視点を持つ自在な語り手による語りへの傾斜を意味していると言えるのではないかと思う。

二章で扱った(ハ)，(ニ)についても，第一部と第三部の間には大きな違いがある。違いの一つは，(ハ)の如き，無敬語で人物の心理や状態を説明し，その文末を，語り手の回想「けり」で結ぶ形が，第一部の源氏にはなく，第三部の薫にはあることである。(ハ)の如き叙述は，語り手がこれらの人物に近侍した女房という設定のもとではなし得ぬものであり，作者に近い自在な語り手であるからこそなし得る表現であろう。すると(ハ)に関する違いも，第三部における近侍古女房としての語り手の後退を意味していると言える。

違いのもう一つは，(ニ)の如き，語り手が無敬語で批判や揶揄を加える場合，薫に対しての方がずっと辛辣なことである。源氏に対しては，せいぜい，

- いとわろき心なるや。（賢木二158）
- うたてある心かな。（胡蝶四187）

程度であるのに，薫に対しては，

- さしあたりて，心にしむべき事のなき程，さかしだつにやありけむ。（匂兵部卿八34）
- ……いとはづかしげなめる姫たちの御心どもには，（出生の秘密を）聞き置き給へらむかし，と，おしはからるゝが，ねたくもいとほしくおぼゆるにぞ，また，もて離れてはやまじ，と，思ひ寄らるゝつまにもなりぬべき。（椎本八156）

などと，薫自身が気付かない心理のからくりを解明して見せてくれる。この辛辣さは近侍古女房という実体的な語り手にはなし得ぬところで，(ニ)の如き叙述における違いも，やはり，第三部の語り手が近侍古女房という「た

てまえ」から遠ざかり，作者に近い，自在な語り手としての要素を濃く持ちながら語っていることを示すものだろう。㈡は草子地なのであるが，先にあげた，帚木巻，須磨巻，匂兵部卿巻などの実体的な女房の発言の草子地とは区別して考えるべきだろう。

㈠，㈡も，㈠，㈤と同じく，近侍古女房の語りとは考えにくく，全知で自在な，作者に近い抽象的な語り手によるものと考えられるわけだが，㈠，㈤，㈠，㈡が同じ位相の語り手による語りであることは，これらの叙述がしばしば近接して同一箇所に出現することからも裏付けられよう。作者・紫式部には，㈠，㈤，㈠，㈡の表現は同質の位相の語りと意識されていたのではなかろうか。

結　語

第三部では，薫の主観直叙や，薫の心の内奥，秘かな状態・思惟などを無敬語で述べる表現が，第一部の源氏の場合より著しく増加している。また，語り手の立場から薫の心や内面的な状態が無敬語で説明されたり，その心や状態に対して源氏の場合より遥かに鋭い批評が加えられたりもする。

源氏物語には，実体的な近侍古女房としての語り手と，全知視点を持つ作者に近い自在な語り手と，二通りの語り手が読み取れるのだが，これらの無敬語の叙述は，実体的な近侍古女房による語りとは考えにくく，全知で自在な，作者に近い語り手によるものと考えられる。

第三部に至って，心理描写や心理批評など，人物の心に記述の重点が置かれるに伴い，語り手は，作中人物に近侍した古女房という実体的な語り手像から遠ざかり，作者に近い抽象的な語り手としての要素を強めていると言えようか。

注

注１　拙稿「源氏物語における敬語の例外的取捨と語り手」「同（その二）」（『十文字学園女子短期大学研究紀要16，18』1984，1986）

注２　小山敦子「『の』『が』『は』の使い分けについて――展成文法理論の日本語への適用――」（『国語学』66輯）

注３　『平安女流文学の文章の研究　続編』6p.

注４　『源氏物語研究』所収「敬語の文学的考察――源氏物語の本性（その二）――」

注５　『源氏物語生成論』　191p.

注６　注１に同じ

注７　「源氏物語の文章」（『国文学解釈と鑑賞』昭和44年６月），「心内語の問題」（『講座　日本文学源氏物語下』）